

会計プロフェッションのヒューマンドキュメント誌

# Accountant's

[アカウンタンツマガジン]

magazine

July 2022  
vol.

66

**Biographies of  
Great Person**

会計士の肖像

株式会社アットストリーム  
代表取締役  
アットストリームパートナーズ合同会社  
理事長・代表パートナー

**大工舎 宏**

**Office Scope**

事務所探訪

**森総合  
税理士法人**

**The Accounting  
Department**

経理・財務最前線

**株式会社  
GA technologies**

**The CFO**

ニッポンの  
最高財務責任者たち

株式会社サイバーセキュリティクラウド  
取締役CFO

**倉田雅史**

**Challenge for the  
New World**

熱き会計人の転機

テクネ監査法人  
代表パートナー 公認会計士

**前田昌太郎**





**Accountant's**  
magazine  
**CONTENTS**  
July 2022  
vol. 66

**Staff**

発行人／黒崎 淳  
編集人／安島洋平  
編集デスク／小山満也、出村勇樹、中村 陽、  
山野由香利、日野西 資延、相澤明依  
編集ディレクション／菊池徳行(株式会社ハイキックス)  
デザイン／RuffGong DesignStudio  
本誌掲載の写真、記事などコンテンツの無断転載を禁じます。  
©JUSNET Communications Co.,Ltd

取材に当たっては、新型コロナウイルス感染防止対策を徹底しております。

**Accountant's Opinion Part2**  
vol.41

今、監査法人の設立要件自体から見直すような議論が求められている

大原大学院大学 会計研究科 教授  
青山学院大学 名誉教授 博士(プロフェッショナル会計学)

**八田進二**

2

**Biographies of Great Person**

**会計士の肖像**

視野を広げ、「これがやりたい」を  
基点に、仕事を選ぶべき。  
公認会計士の専門性を生かせる  
活躍の場は数多くあるのだから

株式会社アットストリーム 代表取締役  
アットストリームパートナーズ合同会社 理事長・代表パートナー

**大工舎 宏**

4

**Office Scope**

**事務所探訪 vol.60**

経営リスクを早期発見し、顧客の満足水準を超える  
予防治療を軸にアドバイス。会計・税務で人々を笑顔に!

**森総合税理士法人**

12

**The Accounting Department**

**経理・財務最前線 vol.55**

最先端技術をフル活用して、“不動産テック”の台風の目に。  
スピード経理が成長を支える

**株式会社 GA technologies**  
**Accounting Team**

14

**The CFO**

**ニッポンの最高財務責任者たち vol.57**

事業の認知度向上と  
成長スピードの加速に、  
今、全身全霊で注力!

株式会社サイバーセキュリティクラウド  
取締役 CFO

**倉田雅史**

16

**Challenge for the New World**

**熱き会計人の転機 vol.32**

原点は就職氷河期世代の苦労体験。よいことを、長く、  
大きく続けて大儲けして全員で笑顔になりたい

テクネ監査法人 代表パートナー 公認会計士

**前田昌太郎**

20

**22 Accountant's**  
magazine  
バックナンバーのご案内



視野を広げ、「これがやりたい」を  
基点に、仕事を選ぶべき。  
公認会計士の専門性を生かせる  
活躍の場は数多くあるのだから

Biographies  
of  
Great Person  
会計士の肖像  
vol. 64

Hiroshi Daikuya  
株式会社アットストリーム  
代表取締役  
アットストリームパートナーズ合同会社  
理事長・代表パートナー  
取材・文／南山武志 撮影／大平晋也

# 大 工 舎 宏

## 大阪の下町商店街に 生まれたことで、 育まれた独立心

ともすれば規模を追い、ともすれば本質的ではないテーマに傾注しがちなある、コンサルティング業界。そんななかでアットストリームは生まれた――。同社の代表取締役就任にあたって大工舎宏がメンバーに向けて発信した「ビジョン・ステートメント」には、会社の出自がそう記されている。実際、同社は、「セールスよりプロダクション重視」の理念をメンバーが共有し、実行している。そのビジネスモデルは、「公認会計士資格を資格のまままで終わらせない」という大工舎の若き日からの思いを具現化したものでもあった。

生まれは、大阪市の生野区というところ。隣接する西成区は漫画『ジャリン子チエ』の舞台ですから、活気のある下町ですね。今は少々寂れてしまったのですが、両親は商店街で化粧品店を営んでいました。真向いが銭湯で、夜遅くまで、けっこうお客さんが入っていたのを覚えています。

小学校時代の思い出といえば、5、6年生の時に、「武部塾」という個人塾に通ったこと。中学受験のための勉強が目的だったのですが、塾というより寺子屋の雰囲気、座布団に正座して

ルで会計士資格の予備校に通い、当時の第二次試験の7科目を2時間ずつ、1日14時間の勉強を自分に課しました。会計士資格を持つ人の多くはそうだと思いますけど、掛け値なしに人生で一番勉強したのはあの時期です。

**引く手あまたのなか、  
あえてアンダーセンへ。  
コンサルの妙を知る**

正味10カ月ほどの猛勉強は実を結び、大学4年の夏、初めて挑んだ公認会計士第二次試験で、見事合格を果たす。卒業後は、監査法人に入って正式に資格を取得、いよいよ夢の実現へとということになるのだが、大工舎はここでも「普通の選択」をしなかった。大学を出た91年といえば、バブル経済の時は越えていたものの、いまだ学生が就職先を選べる時代。やはり複数の大手監査

授業を受けるんですよ。挨拶とか勉強の態度とかにも厳しくて、普通の学習塾と違って情操教育的な部分がすごくしっかりしていた。何事かに集中してコツコツやるというのをあの時期に経験できたのは、今から考えても貴重なことでした。

その塾の卒業文集に、将来やりたい職業を書く欄があって、なんとそこに「会計士」って書いていたんですよ。僕ももちろん、どんな仕事なのか理解していたわけではありません。親は、「家業を継げ」とは一度も言いませんでしたが、「普通のサラリーマンではなく、何か手に職を」とか「資格も大事だ」とか、しょっちゅう口にしていましたから、それが刷り込まれていたのかもしれない。算数、算盤は得意だったので、「ならば会計士かな」と子供なりに考えたのでしょ。

塾通いの甲斐もあって、1981年、志望していた中高一貫の名門、私立大阪星光学院に合格。部活は野球を選び、そこからは「野球が勉強か」という生活が始まった。高校生になっても野球に打ち込んだ大工舎だったが、一方の学業のほうでは、高校2年の進路選択でいったん理系クラスに入るものの、結果的には「文転」という紆余曲折を経ている。

法人から内定を得ていたにもかかわらず、勤務先に選んだのは、「当時、国内の規模的には7、8番手」のアーサーアンダーセン大阪事務所だった。

周囲は、当然、当時の4大監査法人のどこかに行くものと思っていたらしく、相当驚かれました。「大工舎くんは変わっているね」って（笑）。

私自身、最初からアンダーセンにしようと思ったわけではないのです。決め手の一つになったのは、面談で会った先輩方。話の中身や雰囲気、他の法人とちよつと違ったんですよ。会計士のキャリアといえば、法人で出世を目指すか、税理士として独立するか、くらいのイメージの人が多いなか、アンダーセンではコンサルティングの仕事もある、国際的に活躍することもできる、と。それぞれの志向がバラエテ

どちらかといえば、数学や物理などの理系科目のほうが得意でした。ですから理系を選んだのは、ある意味自然な流れ。でも、高2の冬休みになって、具体的に大学のどの学部に進もうかと考えた時に、「待てよ」と思ったのです。理系で行きたいのは、医学部ぐらいしかイメージできなかった。サラリーマンにはならないように洗脳されていたけれど（笑）、さりとて工学部や理学部に行つて研究職に就くというのも……。かなり真剣に悩んだ末に、将来のことを考えたら文系だ、という自分なりの結論を出しました。それで、休み明けに担任の先生にお願いして、3学期から文系クラスに所属替えです。

そうなら、目標は同じ高校から多数が受験する京都大学の法学部。相変わらず資格のことも頭にあつて、法学部なら経済の勉強もできるだろうし、とりあえず関西の最難関をターゲットにしよう、と思つたのです。

― 首尾よく現役合格することができ、法学部生になったので、1年生の時には司法試験を目指すサークルに入つて勉強してみました。でも、イマイチ法律は性に合わない。それで見切りをつけ、2年の終わりがらいに、やっぱり会計士を目指そうかと。結局ここで「小6の夢」に戻つたわけです（笑）。

― 本気モードで試験勉強を始めたのは、3年の夏頃でした。ダブルスクー

イに富んでいて、何より「資格を取つて終わり」ではなく、「ここからスタートだ」という熱量みたいなものが伝わってきました。

実は学生時代から、資格を取るイコール「公認会計士の仕事をする」というイメージが、私にはあまりありませんでした。そうではなくて、「会計士資格を取つて、経営にかかわるコンサルのような仕事がしたい」という漠然とした思いを抱いていたのです。そういう自分には、アンダーセンの諸先輩方の話がとりわけ刺さつたのでしょう。

話からは、外資系ならではの主力主義の厳しさも垣間見えました。それを怖いと感じるかチャレンジしがいがあると思うのかは人によるでしょうけれど、私は怖いもの見たさで、お世話になることに決めました。

会計監査部門のスタッフとして入社後は、主にメーカーや流通業をはじめとする上場企業や外資系日本法人などの監査業務を担当しました。お話ししたように、もともと「会計士の仕事」すなわち会計監査を極めたい、という強い思いを持っていたわけではなかったのです。ただ、やってみると、監査というのが単に帳簿をチェックするだけの仕事ではないことがわかりました。外資系ファームだということもあったのでしょ、業務の流れを理解したうえでリスクにアプローチしていく、



大工舎 宏  
僕は法律を勉強し、将来は会計士になる。仕事は、法律を勉強し、将来は会計士になる。仕事は、法律を勉強し、将来は会計士になる。仕事は、法律を勉強し、将来は会計士になる。



上/小学生5、6年生の頃に通った、寺子屋形式の私塾「武部塾」の卒業文集「文集大地」。大工舎氏のコメント欄には、「将来会計士のような仕事につきたいです」と書かれている下/左は、1997年11月、アーサーアンダーセン時代に人生で初めて執筆した著書「ミッションマネジメント」(生産性出版)。右は、2004年12月、アットストリーム創業後最初に執筆した著書「経営の「突破力」現場の「達成力」」(日本能率協会コンサルティング)。有名ではない会社の人間が書籍を出すことの難しさを痛感したそう



高校3年、夏の高校野球・大阪大会1回戦に先発投手として出場。完投するも、スリーランを浴び、残念ながら敗退



大阪星光学院中学校・高等学校に進学。6年間、野球部に所属した。高校1年の修学旅行で、野球部の同級生たちと



小学校5、6年で通った私塾「武部塾」の卒業式。勉強だけではなく、コツコツと努力することの大切さを学んだ



小学校最後の運動会。生徒会長として、秋の大運動会で宣誓の挨拶を任された



小学4年の時、ピアノの発表会で練習の成果を披露した



1968年、大阪市の生野区にて誕生。初節句の記念写真。両親は商店街で化粧品店を営んでいた

## 会計士の肖像 History of Hiroshi Daikuya ～10代 (1960年代～1980年代)

という発想が徹底されていたんですね。クライアントのビジネスそのものを理解する必要があるので、若い頃に会社のオペレーションやマネジメントの実際を学ぶことができた。得がたい経験だったと、今でも思います。

● 徐々に「重要案件」も任せられるようになり、監査業務でめきめき頭角を現した大工舎だったが、入社4年後の95年、27歳にして、自ら手を挙げて新設されたビジネスコンサルティンク部門に異動する。「このまま、ずっと監査の仕事が続いていくのか」と自問自答した末に、出した答えだった。

● 監査が嫌な仕事だったのかというと、そんなことはないですよ。正直、監査の世界で大きな役割を担うこともできたかもしれません。ただ、自分の興味は100%そこに向いていないことも、自覚していました。監査人は、顧客の決算を検査する、いわば彼らと対峙する立場です。その社会的な意義は重々承知のうえで、私自身は顧客と同じベクトルを向いた仕事をしたかった。

● 折も折、アンダーセンが日本でのコンサルティンク事業強化の方針を打ち出し、新たな事業部をつくったのは幸運でした。93年に合併した朝日監査法人(当時)とアンダーセンの双方からコンサルを志向する人間を集めたので

● たな選択をする。志を同じくする仲間たちとともに、独立を決意したのである。資金の裏付けが得られたことも、決断を促した。創業メンバーの一人がネットビジネスを手掛ける米国・韓国の資本家から、出資の約束を取り付けていたのだ。確かに1回目の出資を受け、それを原資に事務所を借り、人の採用準備も整えて、さあスタートという矢先、思わぬ事態は起こる。

● 私がアンダーセンを退職したのは、2000年の12月末で、01年の4月から新会社の事業開始、というスケジュールだったのです。ところが、その直前になって、資本家から「ネットバブルが弾けて経営が悪化したから、2回目の金は出せない」と。当時、同じよ

● すが、その異動メンバーに加えてもらうことができたのです。

● 実際にはコンサルをやってみて、自分にはやっぱりこの仕事に向いている、と実感しましたよ。アドバイスの結果、業務改善が実現すれば、顧客の収益はアップします。経営者からは、素直に「あなたに頼んでよかった」と感謝される。「先生」とは呼んでもらえても、心から感謝されるという場面はあまりない、監査との違いです(笑)。

● また、コンサルティンクの領域で、取り組みの幅をもっと広げていきたいとも考えるようになりました。最初の頃は、会計士の知識を生かした原価管理、管理会計制度の設計といった業務からスタートしたのですが、その後、大企業を中心にBPRの手法が一世を風靡し、アンダーセンもその分野の拡大に舵を切ったのです。ひとこと言え、業務改革のためのシステムの選定・導入をコンサルするというわけですが、「まずシステムありき」の業務には、あまり食指が動かなかったんです。戦略の策定とか、業績評価の仕組みづくりといった企業改革や組織変革とかに直接かかわりたい、と。

● そこで、再び手を挙げたんですよ。「システムではなく、ミッションを起点にした組織変革のサービスを提供する新たな事業がやりたい」と。ベースになったのは、アンダーセンの海外研修うなパターンで海外の資本家が日本の起業家に出資するという例が珍しくなかったもので、私たちにも協の甘さがあったのは確かです。

● とはいえ、「えらいこと」になってしまいました。当初から数十人規模でスタートという絵を描いていたので、人件費とオフィスの賃料だけで、出資金の残りはすぐに消えてしまいます。一方、対外的にも公表しているし、すでに人の採用はかけているし、「退くも地獄」の状況。事業継続を主張する仲間もいるなか、私は「撤退しよう」と訴えました。他に投資者を探すといった方策がないわけではないものの、時間は切迫していました。メンバーで議論の末、結局つくったばかりの会社を閉じ、内定者に頭を下げ、オフィスを引

● で学んだ、「企業はまずミッション、バ

● ーパスを明確にして、そこから具体的な活動計画、数値目標を設定すべきだ」という方法論です。

● システムの仕事は、数億円規模の大プロジェクトになります。一方、新設され、私がリーダーを務めたチームの案件は、それとは2桁ぐらい違う小ぶりなものでした。ビジネスとして考えるのならば、決して「賢い選択」とはいえないでしょう。でも、私は自分が面白いと思えるもの、お客さんに心から喜んでもらえる仕事をチームのみんなとつくりたかった。余談ながら、私はこのミニチームに、法人の「本業」と違うことを事業にしているという意味で、「アザーズ(Others)」と命名しました(笑)。

まさかの「梯子外し」、立脚点を再確認し、独立・創業を果たす

● 実際、出井伸之社長時代のソニーが「これは面白い」とミッション型人事制度を採用するなど、チームは小ぶりながらもブランド価値の高い案件にかかわり、存在感を高めていく。ただし、日本市場での規模拡大を追求するアンダーセンにおいて、その事業はどこまで行っても「アザーズ(その他)」に過ぎなかった。組織の一員であることに限界を感じた大工舎は、ここでまた新

● き払うことに。そこからの数カ月は、幻で終わった会社の後始末が、私の主な仕事になりました。

● 約束されていた資金調達も、一瞬にしてパーに。起業にとって、これほどのダメージはあるまい。しかし、メンバーはめげなかった。後始末が終わった01年7月、あらためてアットストリームコンサルティンク(現アットストリーム)を設立、大工舎は共同経営者・取締役に就く。「他人を頼らない」という教訓を胸に、出資金をみんなで持ち寄り、再スタートを切った。

● スタート時の共同経営者は、私を入れて4人。すぐに2人が加わりました。全員、アンダーセンの大阪事務所、名



コンサル会社の「一員」には、なってほしくない。「一人ひとりがブランド」のビートルズに!



1995年、妻の珠美さんと結婚。息子と娘、2人の子宝に恵まれた。2014年の夏、愛犬ボノ太(当時0歳)を加えた家族の肖像。この頃、新たな趣味でウクレレを始めた



2007年12月に開催された、顧客企業との大切な交流の機会「アットストリーム・プロセスイノベーションセミナー」に登壇した大工舎氏



2001年、現株式会社アットストリームを共同設立。6人の創業メンバーと海外ビジネス視察のために訪れた中国・上海にて



1994年、アーサーアンダーセンのシニアコンサルタントに昇格。フィリピン・マニラで行われた昇格者研修に参加した



大学4年時に公認会計士第二次試験に合格。1991年、アーサーアンダーセンに入社。1年目の夏、シカゴ郊外のセント・チャールズで行われた海外研修で同期入社仲間と



京都大学法学部に進学。大学2年時、ボランティアサークル「サイモン」の夏キャンプにて。レクリエーションリーダーを務め、習得したギター演奏を披露

会計士の肖像

History of Hiroshi Daikuya 20代~40代 (1990年代~2010年代)



**Profile**

1968年7月15日 大阪市生野区生まれ  
 1990年10月 公認会計士第二次試験合格  
 1991年3月 京都大学法学部卒業  
 4月 アーサーアンダーセン 大阪オフィス入社  
 1994年3月 公認会計士登録  
 2001年7月 アットストリーム コンサルティング株式会社 (現株式会社アットストリーム)を共同設立 取締役就任  
 2013年7月 株式会社アットストリーム 代表取締役就任  
 2018年7月 アットストリームパートナーズ 合同会社を共同設立 代表パートナー就任  
 2022年7月 アットストリームパートナーズ 合同会社理事長・代表パートナー 就任  
 家族構成=妻、息子1人、娘1人  
 ◎その他の現職  
 大研医器株式会社 社外取締役  
 甲南大学経営学部 非常勤講師

古屋事務所で働いていた人間です。

みんなマネジャークラス以上のキャリアの持ち主で、能力は申し分なし。先行きに不安を覚えるようなことはまったくなかったのですが、なにしろあるはずの元手が消えてしまった(笑)。ありがたいことに、付き合いのあったITベンダーや金融機関などの紹介もあって、順調に仕事が獲得できたといえ、成果を出して報酬が入金されるまでには、タイムラグもあります。でも、振り込まれたお金を目にするまでは、給料はゼロで頑張ろう、と。こういうところは、創業メンバーの強さなのでしょうね。

いきなり出鼻をくじかれて、ある意味恥もかきました。ただ、スタートアップで大変な苦労をしたことは、我々にとって「雨降って地固まる」経験でもありました。負け惜しみではなく、あのことがあったから、今がある。

ゼロからのスタートにあたって、どんな会社にするのか、何度も話し合いの場を持ちました。その結果まとめた創業時のビジョンには、「一人ひとりがブランドとなるファーム」というキーワードがあります。言ってみれば、「ピートルズ戦略」。新しく入ってくる人たちにも、単に「コンサルティング会社に勤める人」にはなあってほしくなかった。20年経った今も、このことは常に意識しているんですよ。

決して収益性の高い仕事ではありません。でも、そうやって顧客に寄り添って、「アットストリームさんがいて助かった」と言われる存在でありたい。つまるところ、コンサルティングの仕事が心底好きなんです。そういう人間たちの集団がアットストリームなのです。

13年7月、大工舎は同社の代表取締役に就任する。18年には、将来の事業承継も見越した組織再編を実行。事業をプロジェクト型コンサルティングに最適化したアットストリームコンサルティングと、アドバイザー型コンサルにに対応するアットストリームパートナーズに分社化したうえで、両社をホールディングカンパニーのアットストリームが束ねるかたちとした。ところで、本人は、今でもホールディングスの代表と、パートナーズに所属するブレイヤーを兼務している。

常に本質を追う組織で「生涯、「コンサル」を貫きたい

実際、製造業のコンサルが得意、会計士で経営管理の仕組みづくりに長けている、システム領域に詳しい、生産管理に強い、といったそれぞれ異なるバックボーンを持つ6人が、それぞれ



の分野で仕事をつくることからスタートしたアットストリームは、20年間で約45名のコンサルタントを擁する組織に成長した。「会計」「生産」「顧客接点」「IT」「人・組織」の強みを持つプロフェッショナルが揃い、多様な人材が融合して顧客の様々なニーズに対応することが可能となった。

大手のファームなら、上は管理に専念というピラミッド型が普通で、利益極大化には、そのほうが効率的でしょう。でも、当社の場合は、トップ層であってもプロジェクトに入って、実際に顧客と話をします。そうすることで、コンサルの質を担保する点にも、人を育てていく。そういう組織だからこそ、プロダクション重視を実現できるというのが、私の実感です。

ただ、こちらにいくら熱意があっても、お客さまに評価されなければ意味がない。監査法人のように安定的なクライアントがいるわけではなく、常に仕事を獲得していくのは、それなりに大変です。ですから、あらゆる機会を生かして、身の丈に合ったかたちで自分たちをアピールする。そこに知恵とエネルギーを使っています。

年1回、「プロセスイノベーション

「身の丈に合った仕事をしていこう」というのも、創業時の出来事で身をもっていうか、金をもって痛感させられたことです(笑)。人員に関していえば、毎年2、3人の純増で、人材が成長するスピードに、会社の成長スピードを合わせていく、というイメージ。

青臭いようですが、お客さまの事業や業務を改善していくという本質から外れた案件は、無理して追わないというのも、我々のポリシーです。20年の間には、いろいろありました。例えば、上場企業の09年3月期決算から適用されたJ-SOX。「いくらでも仕事がある」というところから声をかけていただきましたが、当社はあえて「プーム」には手を出しませんでした。

儲かるのがわかっているのにやらないというのは、典型的な機会損失かもしれない。ただ、あの時若手の会計士を何人が採用して仕事を取っていたら、宴の後、他の多くのファーム同様、リストラックチャリタリングしてははず。それでは、人にも会社にも、残るものがないと思うのです。うちが提供できる価値は、「多くの人間が出せます」というものとは違います。例えば、漠然とした課題意識はあるものの、何をすべきなのか整理できていない「フェーズ0」の段階から、我々は相談に乗ります。手間はかかるし、それなりの経験者を投入する必要がありますから、

「ミナー」を開いて、名だたる企業に取り組み事例を講演してもらおうのですが、演者はみな当社のお客さま。一緒に進めた成功事例を語ってもらえるのですから、最高のPRです。新型コロナ前は、終了後に2次会、3次会に繰り出して、「やっぱりアットさんに頼むわ」という関係を築いていました(笑)。提案書だけでなく、ヒューマニティを売り込むのも、立派な営業なのです。

いずれ、会社をいかたちで後進に渡したい。そして、その後も「生涯一コンサル」として貢献していきたいですね。コンサルとしては、まだまだ味が出ると思いますし(笑)。

若い会計士にも、どんなこの世界に入ってきてほしいんです。でも、コンサルは大変そう、難しそう、ブラックじゃないの? (笑)と敬遠される。

今は監査に肅々と携わって上を目指すが、会計士ホルダーとして大手事業会社に転職するかが、人気の2択だとか。その生き方を否定はしません。が、「安定するから」という理由は、気になります。もっと視野を広げて、「やりたいこと基点」で考えてみたらどうでしょう。大いに苦労して手にした資格です。会計士には、専門性を生かして活躍できる世界がたくさんあることに気づいてほしいですね。

※本文中敬称略



年に1回、社員と家族への感謝と慰労を込めて、テーマパークなどに招待する「アットストリーム・アニュアルアップパーティ」を開催。写真は2022年4月の様子



2021年7月に配信された、自社主催のウェビナー「XrossTalk(クロストーク)」。テーマは「ワクワクするKPI」。株式会社そもその赤松範廣氏と対談した



2016年の「アットストリーム・プロセスイノベーションセミナー」懇親会。エンディングの「万歳30唱」が伝統芸となっている



子供の頃から自他ともに認めるコチコチのタイガースファン。長男と球場へ観戦に出かけた際の一枚



2019年、アットストリーム・ゴルフ部の合宿。宮崎県のフェニックスカントリークラブにて



2018年、アットストリームの仲間と一緒に、ホノルルマラソンに参加。フルマラソンを、6時間9分で完走した

会計士の肖像

History of Hiroshi Daikuya

50代~ (2010年代~2020年代)